

中世鎌倉出土の骨角製品 —「辻具」をめぐる一考察—

鈴木 絵美（文化財課 埋蔵文化財調査員）

はじめに

鎌倉市市街地の発掘調査では生活に関わる様々な道具が出土する。膨大な量の遺物の中でも遺跡の年代決定の指標に使用される貿易陶磁器や国産陶器、かわらけなどの土器については様々な角度から研究が進められてきており、徐々にその詳細が見えてきた面も大きいと思う。一方で馬や牛、イルカやクジラなど動物の骨や角などを利用した製品や、それらを加工した後に残る残片なども多く出土することから、中世鎌倉においてそれらを生産し、供給がなされるような体制があったことは想定されるものの、断片的であり、これまでの研究の蓄積としては前者との間に大きな開きがあると言わざるを得ない。とはいえ、出土事例の増加により、鎌倉で出土する骨角製品の中に、出土すること自体が少ないといわれてきた武具や馬具の付属品が多く含まれることが確認されてきており（河野 1989・菊川 1991・2023）、再度それらを見直すことで、都市鎌倉の具体像に近づくための一助となり得ると考えている。今回はその中でも特に「辻具」として報告された（宮田 1982）ものの、その詳細については不明とされてきた資料と、同様の形状や特徴を持つ資料を集成し、出土状況と併せてその用途や骨角製品の加工、生産について若干ながら論点を整理したい。



図 1. 辻具骨角製品出土遺跡位置図

地点番号	遺跡名	地番	報告書
1	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	由比ガ浜四丁目1136番	由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団1997『由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書(第1・2分冊)』
2	千葉地遺跡(今小路西遺跡)	御成町15番5	千葉地遺跡発掘調査団1982『千葉地遺跡鎌倉市御成町15-5番地所在 中世市街地遺跡の発掘調査』
3	若宮大路周辺遺跡(本覚寺境内遺跡)	小町一丁目302番	鎌倉市教育委員会1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1』
4	若宮大路周辺遺跡	雪ノ下一丁目210番	鎌倉市教育委員会1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』
5	若宮大路周辺遺跡(諏訪東遺跡)	御成町806番5	諏訪東遺跡調査会1985諏訪東遺跡(-鎌倉市御成町806番所在 中世遺跡の発掘調査報告書-)
6	若宮大路周辺遺跡(蔵屋敷東遺跡)	御成町822番2	江ノ電鎌倉ビル発掘調査団1983『蔵屋敷東遺跡江ノ電鎌倉ビル建設工事に伴う中世市街地遺跡の発掘調査概報』
7	若宮大路周辺遺跡	小町二丁目39番6他	鎌倉市教育委員会1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』
8	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	由比ガ浜二丁目1015番23	玉川文化財研究所2005『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡』
9	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	由比ガ浜二丁目1034番1	鎌倉市教育委員会1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書09(第1分冊)』
10	長谷小路南遺跡(長谷小路周辺遺跡)	由比ヶ浜三丁目202番2外	長谷小路南遺跡発掘調査団1992『長谷小路南遺跡 鎌倉市由比ヶ浜三丁目202番2外所在遺跡の発掘調査報告書』
11	長谷小路周辺遺跡	由比ガ浜三丁目228・229番	鎌倉市教育委員会1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書09(第2分冊)』長谷小路周辺遺跡発掘調査団1994『長谷小路周辺遺跡由比ヶ浜三丁目228・229番外(No.236)』
12	甘縄神社遺跡群	長谷一丁目227番	鎌倉市教育委員会1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1』
13	米町遺跡	大町二丁目2324番1外	鎌倉市教育委員会2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(第1分冊)』
14	大倉幕府周辺遺跡群	雪ノ下四丁目610番2	未刊行
15	天王館跡	浄明寺稲荷小路105番	未刊行

表 1. 辻具・骨角製品出土遺跡

1. 「辻具」とされる骨角製品について(写真1)

「辻具」として広く知られているのが、古墳時代頃から見つかっている装飾馬具を皮で垂下する場合に欠かせない金具の一つで、著名なものに藤ノ木古墳の出土品がある。古墳時代以降、権威を象徴するものとして馬を飾るようになると、辻具などその装備品は鉄製や金銅製などで作られ、辻具は面懸や尻懸の革紐が交差する部分に付けて使用した。

一方で時代が降り今回報告する「辻具」とした骨製品については宮田 1982 で資料 3・4 を一種の「辻具」として取り上げており、全体が曲面をなしていることから、垂れ飾りや帯金具、また武具や馬具の部品の一つという認識が早くからなされてきた⁽¹⁾。その後、註(1)で掲げた経過もあり、甲冑着用時の装備品である弦巻に紐を通して下げる際に、交差する部分に使用したものと見られている。今回報告にあたってもう一度絵画資料を見直したものの、甲冑着用時の携行品-弦巻や箆周辺にも辻具と見られるような表現は認められなかった。その具体的な使用方法については未だ不明ではあるが、弦巻や箆など甲冑着用時、その携行品にはたくさんの緒が使用されており、その一部品であることは間違いないであろう。

鎌倉で辻具としてすでに報告された資料を含めて、改めて類例 6 例について紹介する。

資料 1. 由比ガ浜中世集団墓地遺跡出土(1 面方竪 4 出土 図 140-47 図版 80)(写真 1-1)地点 9

鎌倉の海浜地区いわゆる「浜地」に所在する遺跡で出土している。外郭の 0.5 cm ほど内側に線を刻み、そ

の内側に花菱状の文様と複数の条線による斜格子状の文様が彫り込まれている。形状は三叉状を呈し、各端部のすぐ下に穿孔が穿たれている。孔の大きさはそれぞれ若干異なり、上・左方が大きく隅丸方形状、右側の孔が円形を呈す。また孔を穿つ位置の目印なのか、孔の左右に一条と二条の線が刻まれる。

報告では細かな帰属は不明としながらも街区 A とした道路状遺構、方形堅穴、土坑などの遺構覆土最上層からの出土としており、周囲から出土する常滑窯はおおむね 7 型式のものが出土しており、廃棄されたのが 14 世紀中頃の時期と考えられる。

この街区 A とした遺構群ではほかにも多くの骨角製品が出土している。先にふれた U 字形骨材と呼んでいる鋸状工具でウマカウシの肋骨を裁断した裁断骨や馬具の一つである野沓、またおそらく辻具に加工途中であった骨製品、用途不明の環状の製品など、製作途中であったり、骨製品加工後に残る残片などがまとまって出土している。このことから考えても遺跡地ごく近辺に、とくに武具や馬具にかかわる骨角製品の部品を製作、加工する工房があったことは予想できる。

資料 2. 由比ガ浜中世集団墓地遺跡出土(街区 A 遺構覆土最上層)(写真 1-2)(地点 9)

1 と同遺跡から出土した。1 と同様に外郭の 0.5mm 程度内側に線を刻み、文様帯を作り出しその内側に文様を施している。文様は中央に五弁花を配しその周りに波文を組み合わせている。形状としては、資料 1 と酷似し、三叉状を呈しその三片の端部にそれぞれ大きさの異なる穿孔が施されている。波文と草花の文様の組み合わせは鎌倉で出土する漆器にもよく見られる文様のパターンであり、その時期などを考える上で貴重な示唆の一つと言えよう。また端部に穿たれた紐を通すものと考えられる孔であるが、1 と同じく、上方の穴が方形状で最も大きく、下の 2 穴がやや小形の円形を呈しており、同じひもを通すための孔ではあっても、通す紐の太さの違いや結び方など若干その意味合いが異なった可能性がある。用途を考える上でもこの点は見逃せない点であろう。また 1 で見たのと同じく孔の位置をあける目印となる一条と二条の線が刻まれており、規格化とまではいかないが、こうした製品を作る際の一つの工程として組み込まれていたのであろう。

資料 3. 千葉地遺跡出土(写真 1-3)(地点 2)

鹿角のもともとの形状を生かして、三叉状に端部を作り出したもので、1.2 とは趣が異なっている。まず鹿角の表面を磨き整えた上で、五弁の花(桜か)と葉文様を削り出した後に、黒漆を塗布して表面を黒褐色に仕上げている。裏面は加工した痕跡が残るものの、骨の海綿質が目立ち、裏面は意識して製作されていないとみられる。上方と左右の端部の穿孔のサイズが異なるが、もともとの骨角の形を生かした作りであるため、その形に沿って最大限孔を穿てるサイズで切り取られたのかもしれない。

報告書中では出土地点などが明記されていないが、鎌倉時代後期～南北朝時代のものと想定されている(宮田前掲)。

資料 4. 若宮大路周辺遺跡(本覚寺境内遺跡)出土(写真 1-4)(地点 3)

本資料はすでに資料紹介がされているが(宮田 1982)、報告書等は未刊行であるため、主にそれに拠って他資料と比較する。本資料も鹿角を使用した製品である。資料 1～3 の辻具がもともとの鹿角の形状を生かしたまさに三叉状を呈すのに対し、本資料は端部を扁平に削り整形して、不等辺の五角形を呈しており、だい

ぶ印象が異なるように見受けられる。各端部の穿孔も大きさがそれぞれ異なるものの、長方形で共通しており、その孔の穿ち方にも上記3点とは違いが認められる。大きさは底辺93mm、高さ31mm、厚さ2～8mm程度で、表面は左右方向に彎曲した凸面をなしている。表面に刻まれた文様は花菱状の文様が一面に彫られており、資料1・2でみられたような穿孔の位置を示す目印などは見られない。

方形竪穴建物の覆土より出土しており、同伴する遺物などから建物は鎌倉時代末～南北朝期の遺構と想定され、その廃絶後にそこに投棄されたものとみられている。この遺跡で特に注目すべき点が竪穴建物の覆土から鋳型、埴埜、銅の鋳滓などがまとまって出土し、近くに銅の精錬・鋳造を行った工房が存在していた可能性が指摘されていることである(宮田前掲)。

由比ガ浜の事例でも、骨角製品の加工、製作に関わるまとまった遺物が出土し、近辺にその工房の存在が想定される場合それと共に石製品の加工や鋳造なども近くで行われたことも多く、その関係が注目される。

資料5. 若宮大路周辺遺跡出土(写真1-5)(地点4)

報告書では掲載されていないため、出土状況などの詳細については触れられない。また遺存状態も良好とはいえないため部分的ではあるが、表面に文様を施した後、漆を塗りこむなど丁寧な作りをしているのが、見てとれる。本資料も表面を磨き扁平に整形し、外郭のやや内側に線を刻んでからその外側と内側で区切って文様を変えて施している。中心には三巴文を配し、その外側には花菱状文様をさらにその外側に斜格子状の文様を彫ってから、黒漆を文様に塗りこんで黒く縁取っている。残存が少ないが、端部の穿孔は細長い長方形を呈す。他資料に比べて、厚みがなく薄手に作られているのが特徴的である。

本地点は上層と下層の2期の遺構群が検出されており、その時期について上層が14世紀中葉、下層が13世紀後半～14世紀前半に想定されている。遺構の性格にも大きな変化があったことが指摘されており、上層は小さい板囲い建物が中心に検出されているのに対し、下層では総柱の大規模な掘立柱建物が主体であり、居住者層の変化が想定される。

資料6. 若宮大路周辺遺跡群出土(写真1-6)(地点4)

5と同遺跡から出土している。鹿角から作られており、表面を磨き扁平に整形し、圭頭状に象っている。底辺が7cm弱、高さが4～5cm、厚さが0.7～1cmを測る。端部の穿孔はそれぞれ大きさが異なるが、特に上方の端部は圭頭状を意識しているように見える。文様は三重の長方形を2ヶ所に配し、その内部におそらく菊花文と四弁の花文を施した後、文様に黒漆を塗り込んで黒く輪郭を際立たせている。

1・2ともに文様を施した上で、黒漆を塗り込んだり端部を圭頭状に象ったりと製品としては手の込んだものと言える。

2. 鎌倉以外での辻具出土事例(図2)

鎌倉において辻具と考えられる資料は現時点で確認できているのが以上6例であるが、他の地域でも点数はごく少ないが、出土している。博多遺跡群の第165次調査において辻具と見られる骨角製品が出土している(図2)。13世紀後半～14世紀のSK2097から出土しており、鎌倉で見つかっているものと同様鹿角の二股状になっている部分を利用したもので、両端と二股の付け根部分の端部に穿孔がある。長さ9.7cmと同じく

らの大きさで、外郭の内側に線を刻み、その内側に文様を彫りこんでいる。さらに共通するのが、付け根部分の穿孔が最も大きく、左右の穿孔はやや小さめの孔が穿たれていることである。文様の種類についてははっきりとはしないが、形状だけでいうと資料3とした千葉地遺跡出土のタイプに非常によく似ている。博多遺跡群では他に第79次調査の第536号でも破片が出土している。それぞれの形状や特徴は、時代的な変化によるかどうかは、詳細な出土状況が分からない中、また事例の少なさもあって不明瞭と言わざるを得ない。ただ、漆を塗布したり、細部の文様も多彩であったりと、製作者側やそれを発注したのかどうかは分からないが、使用する側の嗜好であったりが反映する形での製品化であると思うので、製作された年代の違いという一言では片づけられない、都市鎌倉ならではの様々な要素が絡み合う複雑な物資の需要供給体制を考慮しなければ理解できない。

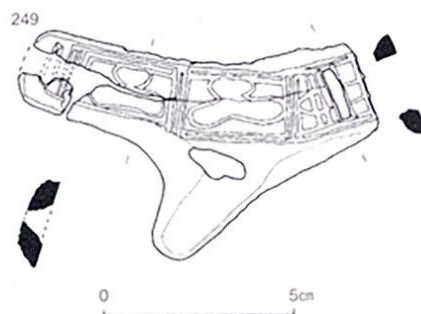


図2.博多遺跡群出土の辻具
(福岡市教育委員会2008より転載)

3. 鎌倉出土のさまざまな骨角製品-武具・馬具を中心に(図1・表1・2、写真3～5)

鎌倉出土の骨角製品は菊川1991に詳しいが、辻具について検討を加える時、その周囲で出土している骨角製品やまた骨角製品以外の鉄製の武具・馬具などについても併せて考える必要があると考える。このため、今回は遺存状態の良好な武具や馬具に関わるとみられる骨角製品について抽出し、改めて概観したい。鎌倉市内で骨角製品の出土する地点を地図に落してみると、量的にはやはり由比ガ浜や長谷小路周辺などの浜地が圧倒的に多い。骨製品の出土事例を挙げると限がないが、根付や鞋、茱萸管といった留め具の類(2・3・7・8・16)、刀装具の一部品である栗型(5・9・10)、筭など(25～31)、馬具では野沓(17・18・21)、また弓矢の道具である矢筈(22)なども出土している。このうち野沓は市内で比較的頻繁に出土が見られ、骨製以外にも金属製品も見受けられる。

用途不明とされる遺物も多いが(14・15・19・20・23・24)、武具や馬具の一部であるものも多く含まれていると予想できる⁽²⁾。

まとめにかえて

辻具の詳細な使用方法はやはり未詳と言わざるを得ない。甲冑着用時に携行する弦巻を下げる際、紐などを通して身体と武具を括り付けるのに使用したということ以上は断定できない。ただ甲冑着用時にはたくさんの緒が使用されるし、その付随する籠や弦巻などにも紐・緒が多用されており、それらのいずれかの中に、今回取り上げた辻具のみならず用途不明とされてきた骨角製品が含まれていた可能性がある。

辻具の形状としてはもともとの鹿角の形状を生かし二股状を呈すものと、端部を削り込み扁平にしたものとの違いが認められる。若宮大路周辺での出土品の所産は鎌倉後期～南北朝期、由比ガ浜出土品など14世紀代と若干の時期差がうかがえる。ただ形態・特徴等の違いがその時期差によるものなのか、使用した階級、もしくは嗜好性などによるものなのかははっきりとしない。使用する側の嗜好や職人集団による違いなど、時期による差だけではない可能性も考慮に入れなければならない。

浜地で確認される骨角製品加工の痕跡の周囲には石製品の加工や鑄造に関する工房が近接した可能性が指摘される場合が多い。またそうした職能に関わる遺物の分布が、浜地において13世紀末以降に大幅な増加が見られることが想定されている(河野 2015・拙稿 2008 など)。辻具を製作した職人もそうした動向と関連があったことが予測できる。さらに博多遺跡群で鎌倉出土と同様の辻具が出土していることは興味深く、鎌倉以外での出土の動向は今後の課題の一つと言える。近年若宮大路周辺遺跡群の調査から底部に墨で『十綱』と記された中国産の白磁壺の底部片が出土している。11世紀末～12世紀前半頃に生産され、鎌倉時代に日本と中国との貿易を行っていた宋の商人グループのサインだと考えられており(鎌倉市教育委員会 2024)、宋と博多との日宋貿易の延長線上にあった鎌倉-博多間の緊密な関係性を示す資料の一つと考えられる。

最後に鎌倉における骨角製品の製作・加工の痕跡から浮かび上がるその生産体制について整理しておきたい。由比ガ浜や、長谷小路周辺など浜地で多く出土しているU字形骨材についてはその骨材の採取の方法が遺跡によって異なる場合がみられることから、工房によって差があった可能性もふくめて指摘がなされる。

長谷小路南遺跡では栗型の未成品がまとまって出土していることから、この製作工程が想定されており、遺跡地近辺での栗型を加工する工房の存在が想定されている⁽³⁾。また一方で長谷小路周辺遺跡の調査から、加工骨の残片が主体で、未成品などがほとんど出土しないことから、動物を対象とした工芸活動における生産体制が長谷小路周辺においては種類別の解体および骨材作出が行われ、それを他所—例えば長谷小路南遺跡などに持ち込んで加工・製品化するという「分業体制」がすでに2面とした13世紀末～14世紀前半には成立していた可能性が指摘されている(宗臺前掲)。

辻具が見つかった遺跡の中にはほかにも武具の部品と思われる遺物が多く出土している地点もあり、それらの製品はどのような生産体制で行われていたのか気になるところである。

今回見てきたような骨角製品の製作に関わる技術の由来はどこに求めるべきか。博多で酷似したものが出土しているが、もともとモデルとなるような技術や製品があったのか、鎌倉で発生したものなのか、またこれらの技術はここで途絶えてしまうものなのか、なにかしらここから派生して後の時代に繋がるような因子となり得るのか、さまざまことがまだまだ不鮮明である。ここで紹介した骨角製品も緻密な文様が施され、また一部には漆が塗りこめられるなどいずれも手の込んだ作品となっている。これらの文様を刻んだであろう職人の手に思いを馳せた時、一点一点、遺跡地一つ一つに込められた歴史的な意義を模索し、地味ではあるが職人の技について細かな観察や分析することで往時の景観が鮮やかに想起させてくれるものとする。

付記

本稿の執筆にあたり河野真知郎、菊川泉、鈴木弘太各位からご指導、ご助言を頂いた。記して感謝申し上げたい。

註

- (1) 資料1～6に代表されるような骨製品が「辻具」ではないかという認識はされていたものの、その詳細については不明とされてきたが、河野真知郎氏が有職故実の観点から詳細な用途等のご教示を伺いたく近藤好和氏に資料を実見していただいたところ甲冑の装備品である弦巻に付随する緒を括り付ける金具の一つとして捉えられそうであるとの見解を頂いた。こうした経過を経て『よみがえる中世鎌倉3 武士の都鎌倉』1989 平凡社において、河野によって弦巻を下げる「辻具」として、取り上げられている(以下辻具と表記する)。ただ、細かな一部品であるため絵画資料等にも確認することは難しく、伝世品等にも確認されていないことからその取り付け方や、具体的な使用方法についてはいまだ未詳と言わざるを得ない。

(2) 用途不明とされている遺物の中にもおそらく武具の部品が多く含まれていると考えている。

例えば23・24は辻具と近接した遺構で出土しており、文様の刻み方などに共通性があることから甲冑などの装備に関わる道具とみている。19も同じく用途不明であるが、袋の口部分の留め具などの可能性を考えている。

(3) 長谷小路南遺跡で出土している栗型の未成品は報告書中では鹿角と考えられていたが、その多くがイルカの上顎骨であることが分かっている(宗臺1994)。

参考文献 ※辻具および骨角製品が出土した遺跡の報告書名はここでは割愛し、一覧表に表記する。

鎌倉市教育委員会 2024 『鎌倉の埋蔵文化財 27』

河野真知郎 1989 『よみがえる中世3 武士の都鎌倉』 平凡社

河野真知郎 2009 「都市鎌倉における動物」 『動物と中世 獲る・使う・食らう』 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編

河野真知郎 2015 『鎌倉考古学の基礎的研究』 高志書院

菊川泉 1991 「鎌倉出土の武具・馬具」 『中世都市研究』 (第1号) 中世都市研究会

菊川泉 2023 「鎌倉出土の馬具」 『鎌倉市教育委員会 文化財調査研究紀要』 (第5号) 鎌倉市教育委員会

笹間良彦 1993 『日本の甲冑武具事典』 柏書房

近藤好和 2024 『増補装束の日本史 有職故実の基礎知識』 平凡社ライブラリー

宗臺秀明 1994 『長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目228・229 番外-中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団

鈴木絵美 2008 「中世鎌倉の職能活動」 『考古論叢神奈河』 第16集

福岡市教育委員会 2008 『博多123 博多遺跡群第165次調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第993集』

図番号	遺物名	出土遺跡名	地点番号	図番号	遺物名	出土遺跡名	地点番号
1	飾り板	甘縄神社遺跡群	12	21	野沓か	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
2	根付	千葉地(今小路西)遺跡	2	22	矢筈	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	9
3	根付	天王館跡	15	23	用途不明環状	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
4	飾り板	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	9	24	用途不明環状	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
5	栗型	千葉地(今小路西)遺跡	2	25	筈	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
6	兜飾り	米町遺跡	13	26	筈	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
7	鞆	若宮大路周辺遺跡群	4	27	筈	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
8	鞆	若宮大路周辺遺跡群	4	28	筈	若宮大路周辺遺跡群	4
9	栗型	若宮大路周辺遺跡群	4	29	筈	若宮大路周辺遺跡群	4
10	栗型	若宮大路周辺遺跡群	4	30	筈	若宮大路周辺遺跡群	4
11	刀装具	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	9	31	筈	若宮大路周辺遺跡群	4
12	刀装具	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	9	32	鹿角加工途中	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
13	刀装具	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	9	33	鹿角加工途中	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1
14	用途不明	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1	34	栗型未成品	長谷小路南遺跡	10
15	用途不明	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1	35	栗型未成品	長谷小路南遺跡	10
16	茱萸管	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1	36	U字形骨材	長谷小路周辺遺跡	11
17	野沓	若宮大路周辺遺跡群	6	37	U字形骨材	長谷小路周辺遺跡	11
18	野沓	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	1	38	U字形骨材	長谷小路周辺遺跡	11
19	用途不明	長谷小路南遺跡	10	39	加工骨	長谷小路南遺跡	10
20	用途不明	長谷小路南遺跡	10				

表2. 骨角製品出土地点一覧(写真1~4に対応)



1. 由比ガ浜中世集団墓地遺跡出土



2. 由比ガ浜中世集団墓地遺跡出土



3. 千葉地遺跡出土



4. 若宮大路周辺遺跡(本覚寺境内遺跡)出土



5. 若宮大路周辺遺跡出土



6. 若宮大路周辺遺跡出土

写真1. 鎌倉出土の「辻具」



写真2. 鎌倉出土のさまざまな骨角製品1
 (番号は表2に対応)



写真3. 鎌倉出土のさまざまな骨角製品2



32



34



35



33



37



38



36



39

写真4. 鎌倉出土のさまざまな骨角製品3